

事象景観論モデルの構築にむけた基礎的研究*

Development of Landscape Model Based on Event *

星野裕司**

By Yuji HOSHINO**

1. はじめに

明治期に建設された沿岸要塞を対象として、そこに現れる環境把握手法を事象という概念に基づき分析してきた。それらの論稿では、構図論と場所論や固定相と可能相、あるいは複眼性と言った表現で研究の枠組みを提示してきた。そこで本稿では、それらの枠組みを整理・統合し、一連の要塞研究の枠組みをより一般的なものとして位置づける事を目的とする。

例えば、木陰に入れば涼しそうだ、というように、実生活で経験される空間は、人々の行動と結びついた操作的意味に満ちている。人は景観に対し時、そこで体験されるであろう出来事をイメージし、それを通じて景観の解釈・受容・操作を行うことが一般的であり、これらは仮想行動として知られる考え方である。一方、軍事技術者が要塞を構築するときには、敵の動きを読みながら地形を自らの味方とするように、砲台を配置していく。そこでは、敵に勝つと言う端的な価値観から、空間の操作的意味を発見し、顕在化させることが行われているはずである。要塞に関する様々な知見を参照することによって、前述した一般的な景観体験に応用可能な、原理的なモデルの構築が可能ではないかと考えている。

中村は、山河から独立しそれを静観する客観の視点がつくり出す景観（「静観の美学（Aesthetics of detachment）」）とは別に、そこへ踏み込む私たちの身体の痕跡が刻まれた棲みごちの風景（「参加の美

学（Aesthetics of engagement）」）の重要性を説いている。そもそも景観論は、環境と人間の相互関係を前提とする現象学的な基盤を持っている。現象学から実存主義に展開した哲学史の歩みが景観論においても踏襲される必然性は高く、むしろ現在では、積極的に必要なことだと筆者も考えている。

2. 事象景観論の視点

（1）一般的な景観論の解釈

景観現象を分析し計画・設計するためのモデルにはさまざまなものがあるが、土木工学の分野では、操作論的景観論というスタンスをとる篠原のモデルが著名であろう。篠原はまず、「景観とは対象（群）の全体的な眺めであり、それを契機にして形成される人間（集団）の心的現象である」と定義し、景観を4つの構成要素（視点、視点場、主対象、対象場）の空間的な関係として捉えようとするモデルを提案した（図-1）。

このモデルを具体的に確認してみたい。図-2は、天橋立を大内峠から眺めた、横一文字と呼ばれる眺望である。ここでは、内海と外海を分ける砂嘴の地形的な特長が一目瞭然であり、砂嘴が主対象、海や岬などが対象場となる。一方、樹木で緩やかに囲繞された空間（視点場）の中に、視点として立ち石がおかれている。この立ち石は「股くぐり」をする場所であり、モデル的に視点まで空間化されている希有の事例として考えることができよう。

このように、このモデルは景観デザイン手法（特に伝統的な技法）をよく説明する。このモデルの明快さは、いわゆる景観そのものだけではなく、景観把握モデル全体の構造をも写真として記録できているとされていると考えられる。この明快さについて、さらに考察していきたい。

*キーワード：景観論，事象，軍事，沿岸要塞

**正員，工修，熊本大学工学部環境システム工学科
（熊本県熊本市黒髪2丁目39番1号，
TEL:096-342-3602，FAX:096-342-3507
E-mail:hoshino@kumamoto-u.ac.jp）

篠原モデルにおいては、2種類の主体がある。それらは、景観を体験・観察している主体（モデル中では視点として代表される）と、デザイナーのように、あるいは図-2の撮影者のように、景観を操作し、デザインしようとしている主体（モデルには含まれず、モデルを外から眺める主体）である。これらの主体と景観との関係には、それぞれ外化が働いていると考えることができる（図-3）。一つ目は、景観に対する体験者の外化である。つまり、篠原モデルにおいては、体験者は景観の外におり、視点場を媒介にして景観に参加している。二つ目は、このような体験者も含めた景観体験に対する設計者の外化である。この外化こそが、操作論的景観論という立場を可能にしている。

一方、仮想行動という考え方においては、このような2種類の主体が逆方向に作用する。ギブソンの「空間の意味（Spatial meaning）」などに影響を受け、中村が創出し、親水行動や道路の景観設計において展開したものである。それは、景観対象を見るときに、無意識にその中に入り込んで行動しようとするという心的な機構を指すものである。例えば、岸辺の柳が水辺に影を落としているのを見たとき、あそこに行けば涼しそうだなあと感じること、小高い丘を発見したとき、あそこに行けば見晴らしが良さそうだなあと感じることであり、意識的・無意識的に関わらず人が日常的に体験していることである。仮想行動を示す例えとして、よく臥遊がひかれるが、その道具となる山水画、とくに瀟湘八景型山水画は、強度の俯瞰景によって大景を写す作品が多い。そのような眺望景観（山水画では点景が描き込まれた）は、空間の全体像と、行為のきっかけとなる部分（点景）を同時に楽しむことができ、仮想行動を誘発しやすいのであろう。ここでは、雪舟の「天橋立図」を例として挙げておく（図-4）。

この仮想行動で働くメカニズムは、篠原モデルの逆のベクトルを有している。すなわち、この体験においては、時間的には未来の自分であったり、空間的には別の場所にたつ自分であったりする分身がまず発生する。その分身がどのような体験をするかを、現在の、この場所の自分が外から眺める。つまり、主体の二重化が生じているのである（図-5）。この仮

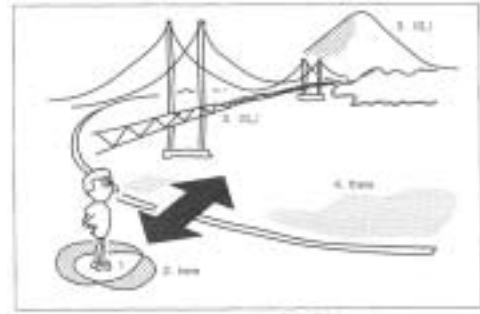


図-1 景觀把握モデル



図-2 大内峠から見る天橋立（横一文字）

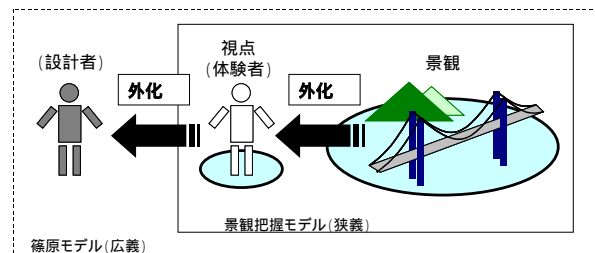


図-3 主体の外化

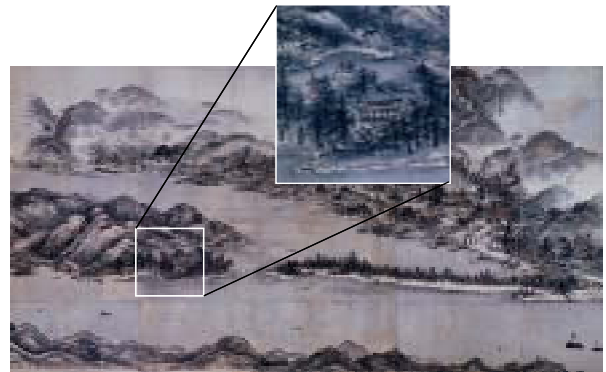


図-4 天橋立図（雪舟）

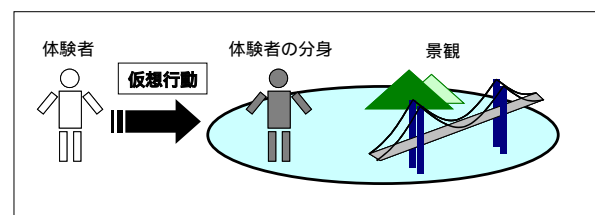


図-5 仮想行動における主体の二重化

想行動と篠原モデルは、表裏一体の関係と考えることができよう。

(2) 景観体験における「もの」と「こと」

屋代は「いわゆるデザイン」と「景観デザイン」の相違を、「物」を対象としたデザインと「こと」を対象としたデザインの違いとして捉えた。「景観デザイン」では「物」と「物」、あるいは、「物」と「人間・心」との関係性に注意が向けられ、この関係性は人間の知覚を通して体験される関係性であるとし、これらの関係性を「こと」としている。

それではここで「もの」と「こと」の違いについて考えてみたい。精神病理学者の木村敏によれば、「ものとは、見るというはたらきの対象となるようなものこと」であり、「見るというはたらきが可能であるためには、ものとのあいだに距離がなければならない」(傍点、木村)。つまり、ある主体が、距離をもって(客観的に)見る対象が「もの」である。一方、「こと」は、この「もの」のような安定した性格をもたないため、定義が難しい。それは主体と「こと」の間に、「もの」との間では成立した確かな距離を策定することができないからである。例えば、木村はその状態を、「私が景色を見て美しいと思っていること、このことは私の側で起こっていることのものであるし、景色の側で起こっていることのものである。あるいはそのどちらの側で起こっていることでもなくて、私と景色の両方をつつむ、もっと高次元の場所での出来事のものである(傍点、木村)」と表現する。

しかし、このような不安定な状態を人は好まない。そのため、不安定な「こと」をすぐに対象化し、「もの」として把握しようとする。これは、景観体験においても同様であろう。引用で示したような景観の「こと」的体験の後、われに帰った人は、「美しいものを見た」と言い、「美しさというものを余韻として味わうことになる」のである。もちろん、このような「もの」的な体験も重要な景観現象である。つまり、景観体験においては、このような「こと」的体験と「もの」的体験の相互を振り子のように行き交っている。さらに、「こと」が「こと」として成立するためには、「私が主観としてそこに立ち会っているということが必要」であるという。上述した景観体験の二重性において、景観に対する主体の(心理的な)位置関係も変化してくる。「もの」的体験においては距離をとり、「こと」的体験においては立ち会うということである。

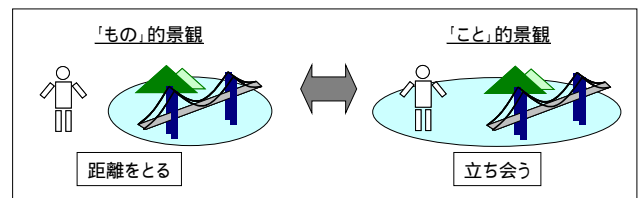


図-6 景観体験における「もの」と「こと」

これらを図-6 に図示する。

以上の相違を踏まえて、前述した主体の二重化という現象を考察したい。まず、二重化される主体と景観の関係は、それぞれ「もの」的であり、「こと」的である。しかし、それらが同時に生まれるからこそ二重化である。木村は、芭蕉の有名な俳句(「古池や蛙飛び込む水の音」)をモチーフにしながら、「(この俳句によって提示される)もの的なイメージの総合が、その背後から純粋なことの世界をはっきりと感じ取らせてくれる」と述べ、この現象を「ものとこととの共生関係」と呼んだ。このような豊かな相互関係を、景観体験において主体の側から捉えたのが、本論の示した主体の二重化であると位置づけられよう。

では、このような「もの」と「こと」の相互性を可能にするような、景観の捉え方はどのようなものか。本研究ではそれを、「事象」と名づけたい。この「事象」とは、決して天候などの現象(phenomenon)ではなく、環境内に生じる出来事(event)により深く関係するものである。例えば、先の芭蕉の俳句において、「蛙飛び込む」という出来事が、あるいはその把握が、古池という情景や水の音に誘発される体験者の叙情、そのような豊かな「こと」的世界を、「もの」を経由して体験者に伝える。このように、「事象」は「もの」と「こと」をつなぎ、それらの相互性の基盤となる。つまり、主体の「行為」や「仮想行動」によって、景観に発見され、あるいはそれらを可能にし、主体の二重化の基盤となるものである。

ここで示したような景観現象の側面を、中村は空間相と形相の二面性として整理している(表-1)。中村のいう空間相とは、仮想行動を通じて可能的行為の場として景観が眺められる場合の側面であり、ここで獲得されるのは、景観の身体感覚的意味である。一方、形相とは、狭義の景観を指すことが多く、「物」の輪郭が意識の中心に形として浮かび出する場合である。このような物は、場所柄と結ばれた縁によって

表-1 景観の空間相と形相

区分	主な景観要素	景観要素の分類	景観体験の内容	評価の観点	価値の発生	価値の伝達
空間相	空間の距離、物の奥行	距離、道路	物の距離感、空間への奥行き感	空間の広さ、奥行き	空間の広さ、奥行き	空間の広さ、奥行き
形相	物の形状、物の配置	形状、配置	物の形状、物の配置	物の形状、物の配置	物の形状、物の配置	物の形状、物の配置
色彩相	色彩の配置、色彩の対比	色彩、対比	色彩の配置、色彩の対比	色彩の配置、色彩の対比	色彩の配置、色彩の対比	色彩の配置、色彩の対比
質感相	質感の配置、質感の対比	質感、対比	質感の配置、質感の対比	質感の配置、質感の対比	質感の配置、質感の対比	質感の配置、質感の対比
動的相	動的要素の配置、動的要素の対比	動的要素、対比	動的要素の配置、動的要素の対比	動的要素の配置、動的要素の対比	動的要素の配置、動的要素の対比	動的要素の配置、動的要素の対比

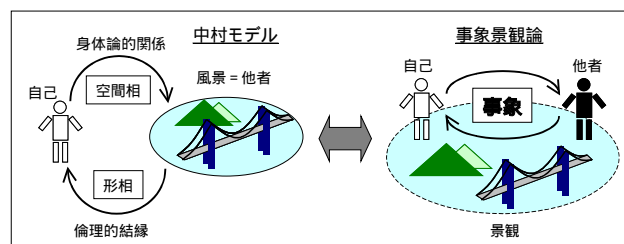


図-7 中村モデルと事象景観論モデルの相違

初めて生きた存在となり、こちらへ眼差しを向けた相貌的な「他者」として現前するとし、この良し悪しは倫理的価値によって決定されるとしている。

「もの」と「こと」の相違で言えば、中村の空間相が「こと」的であり、形相が「もの」的であるといえる。中村は、両者を別のものとして把握しているが、先に示した「事象」という観点から景観を分析すれば、それらをひとつのものとして扱うことができる。表-1 中、価値発生の源、あるいは、環境 - 自我において、空間相・形相ともに「他者」という概念があげられていることに注目したい。自己から他者へのベクトル（身体論的關係）によって、風景の空間相の価値が獲得され、他者から自己へのベクトル（倫理的結縁）によって形相の価値が獲得される。前者の身体論的關係とは、「行為」に関わる問題であろう。しかし、そもそも中村においては、風景は相貌的な表情をもった「他者」として立ち現れている。すなわち、自己と他者との出来事が風景を舞台として生じるということ（事象）、すなわち「行為」の対象としての「他者」が風景に現れるということ生じていると考えることができよう。風景の中に「事象」を読むことと、風景の中に「行為」と「他者」をよむことは同時の現象であり、その固定化されたかたちが、中村の言う空間相や形相となっている。以上の関係を図示すると、図-7 となる。

3. 基礎理論の整理

(1) 他者の問題

本章では、いくつかの基礎理論を整理しつつ、事象景観論の特徴を整理していきたい。まず、「他者」の問題からはじめたい。景観体験における仮想行動などを示す基礎理論としてよく引かれるのが、『The Experience of Landscape』で展開された Jay Appleton の「Prospect-Refuge theory (眺望 - 隠れ家理論)」である。この著書は、様々な文学や絵画等の風景表象を分析しつつ、動物行動学的な観点から景観の美しさについて論じたものであるが、この理論のうちで最も重要な点は、景観体験の中に「他者」の視点を導入したことではないかと考えている。

「人間が環境から美的満足感を受け取るのは、その環境が

棲息する (Habitant theory) のに適した場所であることを象徴的に表現しているからだ」という立場をとる Appleton は、Lorentz による「to see without being seen」に動物の棲息に関する基礎的な条件を読みとる。さらに、環境が動物の棲息に関して、実際にどうなのか (actual potential of the environment) ということではなく、どの様に見えるのか (apparent potential of the environment) ということが「Habitant theory」において重要であるとし、景観の評価に symbolism を導入する。自分の姿を隠す“隠れ場所 (refuge)”の象徴と相手の姿を見る“眺望 (prospect)”の象徴が、“危険 (hazard)”を表現する象徴に抗して備わっている時、人間はそこに棲息地の象徴を見て、美的な満足感を感じとるという。

この理論の鍵である「to see without being seen」という視点は、景観体験の中に「他者」を導入している。なぜなら、「to see without being seen」が成立するためには、自己が見るものおよび自己を見ているものが存在しなくてはならない。その自分とは異なる主体が「他者」である。

サルトルは、「他者のまなざしはわたしに空間を授ける」と述べている。舟木によると、その理由は、「わたしの＜見る＞のうちに「わたしが見られる」ということが組みこまれている」からであり、「その結果として、わたしの身体と他者の身体が - 物体相互の関係のように - たがいの外部に存在していること、おなじひとつの光景のなかに

たがいが見えるようにして、ともに存在していること」が可能となる。先に、前節で、景観を「こと」的に体験するためには、そこに立ち会っていることが必要であると述べた。「立ち会う」ことを可能にするのは、「他者」にまなざされること、その「他者」のまなざしを感じることでありと理解できよう。

一方、「to see without being seen」において要請される他者は、自己に危害を与えるもの、あるいは、自己が危害をあたえるもの、いわば「敵」である。しかし、自己が感情移入できるような、いわば「友」としての他者も存在する。Appleton は、そのような他者を風景の中に認めることを「Participation by proxy（代理による参加）」と表現する。これは、先に示した仮想行動という考え方と同一である。これが代理者になる条件に、Locomotion（運動（力））がある。Appleton は、「the aesthetic enjoyment of landscape is based ultimately on the establishment of an advantageous relationship between the observer and his environment is that he must be free to move within the environment in such a way as to achieve that advantage」と述べている。

では、「Prospect - Refuge theory」において召還された自己、および、2つの他者（敵と友）の関係は、どのようになっているのか。Appleton が紹介している風景画を見直してみたい（図-8）。深い渓谷に突き出した岩は、枝を広げた樹木に覆われており、その上には二人の男がいる。まさに Prospect symbol と Refuge symbol を兼ね備えた好風景である。絵画を鑑賞している私たちは、この二人の男を代理として、風景に参加する。すなわち、彼らは友としての他者である。では、彼らが身を守るべき敵としての他者はどこにいるのか。当然ながら、そのような他者を画中に見いだすことはできない。私たちは、画中には存在しない敵なる他者との関係において、友なる他者の居心地を評価し、風景を觀賞しているのである。この友なる他者からみた場合、敵なる他者も觀賞している自己も、空間の外にいて不可視の眼差しを送っているという点において同様の存在である。すなわち、「風景を觀賞する自己 = 敵な



図-8 Asher B. Durand(1796-1886):Kindred Spirits

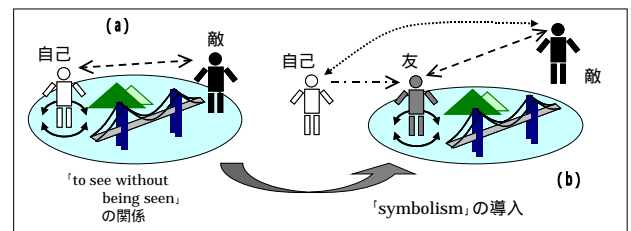


図-9 「Prospect-Refuge theory」における自己と他者

る他者」という関係が成立する。一方で、友なる他者は自己の代理になるということは、「友なる他者 = 自己」という関係も成り立っている。つまり、他者が2種類いるように自己にも2種類あると考えられる。ひとつは敵なる他者である自己、すなわち、外から全体を眺める自己であり、もうひとつは友なる他者である自己、すなわち、内にいて運動を行う自己である。この関係は、前節で示した主体の二重化とほぼ同様の事態と考えてよい。すなわち、主体の二重化とは自己に対する他者性の導入であると考えられることもできるだろう。まとめを、図-9 に示す。

（2）行為の問題

近年、景観やデザインなどの分野で、アメリカの知覚心理学者ギブソンの「アフォーダンス」という概念が注目されている。中村雄二郎は、「環境あるいは事物からの表情を持った働きかけである。だから、それは、知覚者の行為と一体に定義される対象の性質でもある」と紹介し、「なぜ風景や景観にはわれわれにつよく訴えかけてくるものがあるか、についての回答」を与えくれる可能性をこの概念に期待している。

「動物と環境の相補性を包含し」、「既存の用語では表現し得ない仕方、環境と動物の両者に関連するものを言い表したい」とするギブソンは、「Afford（提供する）」という動詞からの造語として、「アフォーダンス」と言う概念を提示した。端的にその内容を述べれば、対象・事象との関係で動物に対し提供する「行為の可能性（opportunities）」であり、例えば、大地のアフォーダンスは「支える」こと、路のアフォーダンスは「歩く」こと、ハサミのアフォーダンスは「切る」ことである。

このような「アフォーダンス」は、「包囲光」によって満たされた空間（「サーフェース」のレイアウト）を観察者が移動することによって現れる「包囲光配列」の変化の中から「不変項」を探索することによって現出する。ここで注目したいことは、観察者（主体）のあり方である。

生態光学の公式化にとって必要なのは、空間と時間に関する伝統的概念ではなく、お互いに相補的なものと考えられる変化項と不変項の概念である。（中略）すべての観察者が同じ環境を知覚できるという事実は、それぞれの視点が他のどの視点にも移動できるという事実に依拠しているのである。

すなわち、まず大事なことは、「移動」による不変項の探索である。しかし、生態光学における主体のあり方は「移動」的なものだけではなく、「遍在」というあり方も呈する。ギブソンは、景観的な例を通じて、以下のように語っている。

迷路の通路、住宅の部屋、町の通り、田舎の溪谷は、それぞれ1つの場所を構成し、1つの場所は1つの景色、半ば囲った所、一群の現れた面を構成する。（中略）探索的移動によって景色が整然となると、家、町、あるいは生息環境全体の不変的構造がとらえられるであろう。隠れたものと現れているものとが1つの環境となる。そのとき、散在したものの下に地平線まで続く地面を知覚でき、同時にその散在物も知覚できる。個体は環境に定位する。それは、地形の鳥瞰図をもつというよりも、むしろあらゆる場所に同時にいるということである。

これまでの論旨では、「もの」と「こと」の間を架橋する理論が欠けていた。しかし、この「遍在」という考え方は、内にいること（つまりは「こと」的に立脚しながらも全体像を把握する、いわば「も

の」的な体験であり、そのベースには「こと」的な「移動」がある。また、「遍在」によって環境の不変構造が明らかになれば、それが「移動」のガイドとなり、また新たな体験をうながすことにもなるだろう。このように、これら2つのあり方の間を揺れ動きながら、私たちは環境のアフォーダンスを探索しているのであり、まさに前節で述べた「もの」と「こと」の相互性としての景観体験であると考えることができる。

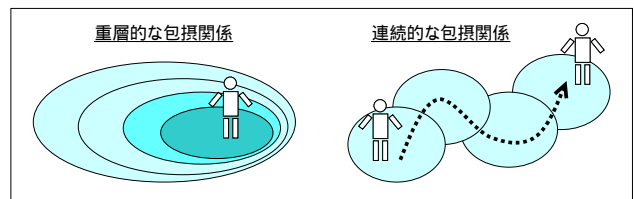


図-10 2つの入れ子構造（包摂関係）

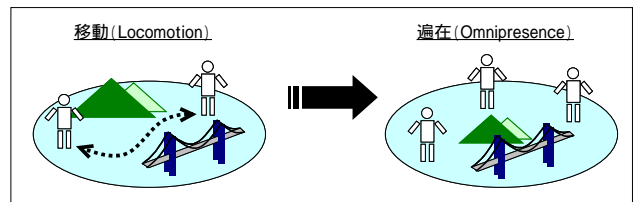


図-11 生態光学における主体のあり方

このような、いわば部分と全体がつながるようなあり方を、ギブソンは「入れ子構造（包摂関係）」と呼ぶ。この関係には2種類あり、1つは小さなスケールから大きなスケールまで、重層的に展開する一般的な入れ子構造であり、もう一つは、ある部屋から次の部屋へと、さらにはその次の部屋へとつながっていくような、連続的な入れ子構造である（図-10）。風景の持つ「入れ子」性は、単に遠近を自在に変化させながら、風景を愉しむという距離感の問題だけではなく、以上のような「もの」的、「こと」的双方の振幅の大きな体験を私たちに提供するという豊かさを風景が有しているということを示しているのである。また、「遍在」という様相は、前項で取り上げた他者の内、「友なる他者」との共存を語っているとも考えることができる。ギブソンは以下のように述べる。

別の人の視点をとるということは、（中略）自分の視点では隠れているが他人の視点では現れている面を知覚できるという意味である。これはつまり、別のものの背後にある面が知覚できるということである。そして、もし

そうならば、すべての者が同じ外界を知覚できる。

この引用で示されている状況は、他者による空間の成立とほぼ同様である。私たちは、ギブソンの言う「移動」と「遍在」というあり方を揺れ動くことによって、環境の「アフォーダンス」を探索し、さらには他者と共有できる環境の「姿」を構築しているのだと考えることができよう。以上より、「移動」と「遍在」を図式化したものを、図-11 にあげる。

(3) 距離の問題

最後に、E.Hallの「プロクセミックス」理論を検討し、事象景観論における「距離」の問題を考察する。ホールは、空間利用の視点から人間と文化のかくれた構造をとらえるための理論として、「プロクセミックス」を創出したが、その空間利用とは、コミュニケーションのあり方（行為のあり方）に基づいた、他者との距離の取り方である。

表-2 4つの距離帯

	密接距離		個体距離		社会距離		公衆距離	
	近接	遠方	近接	遠方	近接	遠方	近接	遠方
特徴	身体的接触、愛撫、格闘	親密な関係、臨界的な自己領域	自己と他者の境界	身体的支配の限界、表情の認知	対象の正確な認知	互いに隔離・遮蔽	痕跡的・無意識的な逃走反応	公的な関係
領域								

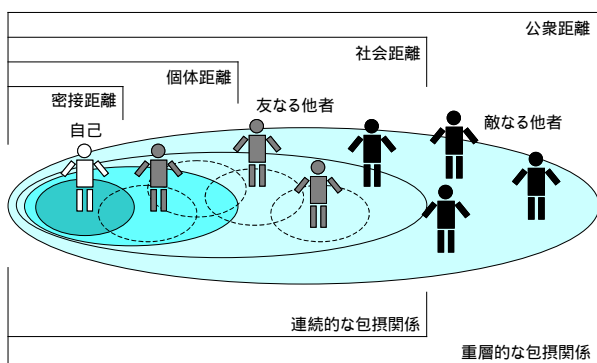


図-12 他者との距離と包摂関係

人は、4つの距離帯を持ち、それぞれに遠近の相を持っているとされている。その4つとは、密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離である。眺望景観という大スケールを扱う本論においては、具体的な距離の指標は重要ではないが、距離帯の4分類と

その特徴のとらえ方は参照すべき事項である。表-2の下段は、自己と他者の領域としての解釈である。これらの4つの距離帯は、ギブソンの包摂関係として理解することも可能である。つまり、公衆距離には社会距離が、その中には個体距離が、さらには密接距離が重層的に入れ子となっている。また、逃走反応を引き起こさない個体距離から社会距離の間にかけては、連続的な入れ子性も確保されているとも考えることができる（図-12）。

4 . 芸術作品に見る事象景観論

芸術作品を通じて、事象景観論的な見方の有効性や一般性を確認しておきたい。取り上げる芸術作品は、ピカソのキュビズムの作品である。

キュビズムの出発点を示す作品は、1907年春から夏にかけて描かれたらしいピカソの＜アヴィニョンの娘たち＞と言われている。この絵画は、「人体表現の極端な歪曲と平面化、および遠近法的な空間のイリュージョンの徹底的な否定」と言う2点において、それ以前の絵画とは全く異なったものであった。完成直後にこの絵画を見た少数の人間に不評を買った後、10年近くもピカソのアトリエに私蔵され、公開されなかったことから、その革命性を伺うことができる。

この絵画の主題は、バルセロナのアヴィニョン街の売春婦たちであるが、もともとこの作品は、売春宿を訪れる2人の男と客を待つ5人の女を描くように構想されていたらしい。この変更は、事象景観論の視点においても非常に興味深い。この変更を、飯田善國は以下のように評価する。

この変わり方は、確かに劇的な変化だといえる。絵を見る人は、画中での娼婦と男のやりとりを見るという関係から、画の中の女たちがあたかも現実の空間にいる現実の女たちであるかのように、絵を見る人に向かって（絵を見るあなたに向かって）挑みかかってくるのを感じることになる。最初の構想の段階よりずっと生々しい主題に変わったのだ。

この変化を図示すると図-13 となる。つまり、構想の初期段階では、売春宿のやりとりを外から見るという一般的な関係であり、本研究の視点で言えば、観賞する主体は外にあり、客を代理として仮想行動

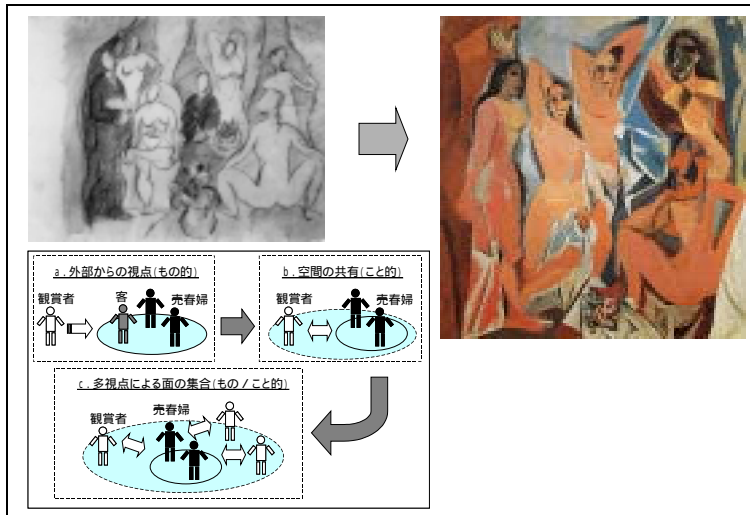


図-13 <アヴィニョンの娘たち>の制作変化

的に観賞するという構造を有していた(図中a)。それを、客を画中から排除し、売春婦を前面に押し出すことによって、観賞者をその空間のなかに引き込み、他者としての売春婦に正対をせざるを得ないような関係を形成させる(図中b)。ピカソは、5人の売春婦の顔を3種類に描き分けているが、その中でもアフリカの仮面をモチーフとしたと思われる画面右側の二人は、売春婦の有する他者性を強調することに成功している。また、<アヴィニョンの娘たち>のもう一つの特徴として、遠近法の否定がある。乾由明はこの点に関して、以下のように語っている。

ピカソが一点集中遠近法イリュージョンによることなく、しかもなお三次元的世界のリアリティを表現することができるかという問題であった。その解答が、一つの対象をさまざまな視点から見たイメージを、同一の画面に結びつけるという方法である。

この多視点による面の集合という手法は、イリュージョンを排したリアリティの獲得という課題への答えであり、まさに、ギブソンの認知のあり方である(図中c)。さらに、画中には描かれない自己が対象の周辺に遍在しているこのイメージは、アップルトンにおける主体の二重化(主体=敵なる他者、図-8の(b)参照)をも想起させる。つまり、ピカソが<アヴィニョンの娘たち>において達成したものは、一般的な「もの」的な絵画体験から、絵画の内部に立ち会うことによって生じる「こと」的体験へ、さらには、ギブソンの「遍在」と同様に、対象を複眼的に見せることでリアリティを確保した、事象景観論的な体験であると考えられることができるであ



図-14 <セレの風景>

ろう。

ピカソは、その後、多視点による面の集合と言う手法を切子面の導入によって深化させていく。その時期の作品としては、<アンブロワーズ・ヴォラールの肖像>などの肖像画が著名であるが、風景画としても<セレの風景>(図-14)がある。飯田は、<セレの風景>に代表される分析的キュビズムの成果をまとめて、以下のように評価する。

分析的キュビズムがやったことは、対象を多視点から眺めることであり、多視点から眺められた対象のフォルムを分析して、それらを再び同一平面に組織することであった。対象が多視点から眺められるということは、そこに異なった時間の流れが同時性として多層的に空間化されるということであった。(中略)本来は人間の眼からは透視できない風景の多次元性と多層性を様々な視点から眺めた部分の風景として分割し、その分割された部分をもう一度ひとつの画面の平面上に、平面の連続として感受しうるように再構成したものである。(中略)絵画という想像的空間の中で、空間の中を歩行する意識が時間を経験し、この時間を経験する意識が同時に空間を経験する意識でもあるという二重性は、われわれが現実の風景の中を歩行している時にも味わう経験であって、ピカソの「セレの風景」は、現実のそういう風景体験を芸術の世界に移植した極めて独特な、新しい絵画であった。

この空間と時間の融合した体験は、ギブソンが「移動」と「遍在」によって明らかにした環境の姿であった。神吉は、キュビズムの目的をより端的に、「彫刻のもつ「八つ眺め」と、対象の内奥に潜む本質的構造を、二次元の同一平面上で展開すること」とまとめているが、

この本質的構造こそが、ギブソンの「アフォーダンス」と同一のものであると考えることができる。

このように、＜アヴィニヨンの娘たち＞に端を発したキュビズムは、現実的な風景体験と同様のものに到達した。本論は、このようなメカニズムを絵画等の表象に頼らず、具体的かつ大きな地形空間において分析するため、軍事的な事例に着目している。

5. 軍事的な視点の有効性

軍事的な環境把握において留意されるのは、敵がどの様に動き、それにどの様に対処すればよいかという点であり、軍事的な事象への観察者の想像力が鍵となる。クラウゼヴィッツは『戦争論』における「軍事的天才」を論じた章において、「地形感覚」という概念を提起している。それは、「この感覚は、いかなる地形についても即座に正しい幾何学的表象を構想し、これに基づいて容易にその土地の様子に通じる能力である。言うまでもなくこれは想像力のはたらきである」というものである。この概念を中心に、軍事における「地形」の意義について考察していきたい。

「地形」を軍事的に見た場合、それは単なる物理的な土地の形状ではなく、見る・撃つ（視界・射界）、隠れる（隠蔽・掩蔽）、近づく（接近経路）という具体的な軍事行動や、目的（緊要地形）、条件（障害）が、「地形」の要素となる。つまり、軍事においてニュートラルで無意味な地形は存在せず、すべて具体的な軍事行動と密接に関連した意味、むしろ機能と呼べるようなものを有している。また、そのような地形の機能は、様々な視点からの考察を通じて発見され、この考察の能力が「地形感覚」ということになる。

そもそも、「地形感覚」の原語は、ドイツ語で「der Ortsinn」であり、英語では「a sense of locality」と訳される。この概念を、我が国にはじめて紹介したのは、森林太郎であり、彼は「地形観」と訳している。つまり、彼の邦訳によって「地形」という問題が、よりクリアに主題化されたのである。

東洋にはクラウゼヴィッツ以前にも、『孫子』という良く知られた戦争論がある。森林太郎もその教養のうちにいたと思われるが、13篇で構成されるの

『孫子』には、地形に関するものとして「地形篇」第10と「九地篇」第11がある。荻生徂徠によると、「総体、地形篇八地形ヲ小ク見タル上ニテ云ヘルナリ。コノ九地篇八大キニ見タル上ニテ云ヘルナリ。地形篇八地ヲ小ク見タルモノナルユヘ地ノ形ナリ。九地篇八大キナル上ニテ云ユヘ地ノ勢ヒナリ」と位置づけられる。『孫子』においては、「形」とは、運動（＝「勢」）の形象化あるいは結果であり、同時に、その「形」を契機に運動「勢」が生じるという相互性をもつものである。これは、本研究において論じてきた「ものとことの相互性」と同様のものとして考えることができる。

すなわち、一般的には、「地形」を「観」と解釈される訳語であるが、上述の「勢」と対になった「形」という概念を参照すれば、「地」に「形」を「観」と解釈することができよう。つまり環境（「地」）に事象（「勢」と対になった「形」）を観るということであり、まさに事象景観論そのものの概念になりうるものとなる。

6. 沿岸要塞の分析に向けて

以上の考え方に基づき、明治期につくられた沿岸要塞を分析することによって、事象景観論のモデルを構築することが本研究の目的である。一般に、現象をモデル化するにあたって、留意すべき点は、モデルの包括性とデザインへの有効性の両立である。モデルの単純さ（＝デザインへの有効性）を担保しつつ、「こと」的な景観体験をも包括するモデルを提示するための材料として選択した素材が沿岸要塞である。

（1）明治期に建設された沿岸要塞の有効性

一般的な戦争の場面では、敵と味方が複雑に混在し、自己や他者などを明確に区分することが難しい。そのため、非常にこみいった構造を有する。軍事的な事例の中でも沿岸要塞を対象にすれば、比較的容易にモデルの検証が行えるのではないだろうか。

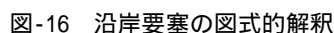
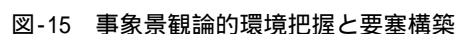
要塞とは、ひとつの構造物を指しているのではなく、多数の砲台群やそれに附属する施設が広い範囲に集散し、その地域を軍事集团的に強化した広域的な水陸一帯の防禦区域を指すものである。沿岸であ

また、沿岸要塞における砲台位置の選定では、陸地側から一つ一つ眺望をチェックするという非効率的な選定の仕方ではなく、最初に要塞予定地を航行し、海側から眺められる陸地景のシークエンスにより砲台候補地を選定、その後、砲台の性能を考慮しつつ位置の調整を行ったと考えられる。これは、まず敵の視点となって、その土地を探索することとであり、その土地の軍事的なアフォーダンスを探索していくという構造になるであろう。

「地形」から「事象」を導き、それらの相互作用の中で全体的な把握を行うプロセスは、沿岸要塞の建設プロセスとほぼ同様になるのではないかと考えている（図-15）。

プロセスは、砲台から敵への働きかけとなるため、図中の破線矢印となる。そして最後に、それら3つの関係が総合的に関係しあい のプロセスになると考えられる。

以上のような考察を経ると、事象景観論モデルがよりシンプルに考えられる。すなわち、まずモデルの最小単位として、景観を中心とした地形・砲台・敵の3者の関係があり、そのユニットがいくつか組み合わさることによって要塞モデルが構築される。これらの3者の関係が、3章で取り上げた基礎理論にほぼ対応している。つまり、砲台と地形の関係(図中)においては、まず敵艦から砲台を眺めた場合の地形の中での位置づけ(例えば隠れ具合や目立ち具合など)が問題となる。それはまさに、アップルトンのいう眺望・隠れ場理論と同種のものである。同様に砲台と敵との関係(図中)は、両者の距離が問題となるためホールのプロセクミックスが働くと考えてよい。最後に、地形と敵の関係(図中)は、地形から敵の動きをどの様に予測するかということであり、ギブソンのように、地形に内在するアフ



オーダンスをどの程度探索できるかということが課題となる。

7. おわりに

本研究では、景観論における「参加の美学」を検討するため、景観体験を「自己」「他者」「地形」の3者が「事象」を中心に関係しあうものとして捉え直そうと目指している。沿岸要塞という特殊な事例を分析しているため、その一般性については未熟な部分が多い。ただし、考え方としては、様々な応用の可能性が広がっていると思う。

例えば、「地形」を「都市空間」と読み替えてみる。都市をそぞろ歩いたり、オープンカフェでのんびり過ごす時、写真として残せるような都市景観を味わう以上に、次々にかわるシークエンス（ギブソンの連続的な包摂関係）に魅了されたり、行き交う人々（「他者」との出会いが、その楽しみの基盤になっているように思われる。これも、事象景観論的な一側面である。

あるいは、見知った土地を散歩したり、故郷に帰ってきた時のなごむような、気がやすらぐ感覚と、旅行などで見知らぬ土地に立ち寄ったときの不安と心浮き立つような気持ちが同居する感覚などの相違も説明可能かもしれない。事象景観論的には、両者とも不可視の「他者」が遍在している。両者の体験の相違は、その遍在する「他者」が友なのか、敵なのかというものに起因するのではないだろうか。

今後は、沿岸要塞を対象とした分析を深め、モデルの精度を高めることに加えて、上のような、より一般的な景観体験に適用し、具体的な景観デザインや計画にヒントを与えるようなモデルの構築を目指していきたい。

参考文献

- 1) 星野裕司・他：九州内の明治期に建設された砲台から得られる眺望景観に関する研究，土木計画学研究・論文集，No.18，pp.339-348，2001.11
- 2) 星野裕司・他：明治期に建設された沿岸要塞における砲台配置と眺望景観の関係に関する研究，土木計画学研究・論文集，No.19，pp.347-358，2002.11
- 3) 星野裕司・他：事象に着目した眺望景観に関する一考察 - 軍事的知見を参照して - ，土木計画学研究・講演集，

CD-ROM版、2002.

- 4) 中村良夫：風景学入門，中公新書，1982
- 5) 中村良夫：NHK人間講座 風景を愉しむ 風景を創る、日本放送出版協会、2003
- 6) 篠原修編：景観用語事典，彰国社、1998
- 7) 篠原修：新体系土木工学59：土木景観計画、技報堂出版、1982
- 8) 中村良夫：交通行動に関連した景観体験の空間意味論的考察、国際交通安全学会誌Vol.2 No.2、1979
- 9) 屋代雅充：景観をデザインする：景観デザインの対象と仮想行動のための景観デザイン、木原・進士編『山河計画 景』、思考社所収、1985
- 10) 木村敏：時間と自己、中公新書、1982
- 11) 中村良夫：大地の低視点透視像の景観的特質について、土木計画学研究論文集No.1、1984
- 12) Jay APPLETON：The Experience of Landscape - Revised Edition、John Wiley & Sons Ltd. 1996
- 13) 舟木亨：＜見ること＞の哲学 鏡像と奥行き、世界思想社、2001
- 14) J.J.ギブソン：生態学的視覚論、サイエンス社、1985
- 15) 中村雄二郎：述語集、岩波新書、1997
- 16) 佐々木正人：知覚はおわらない - アフォーダンスへの招待、青土社、2000
- 17) エドワード・ホール：かくれた次元、みすず書房、1970
- 18) 乾由明：20世紀美術の黎明、『世界美術大全集 第28巻 キュビズムと抽象芸術』所収、小学館、1996
- 19) 神吉敬三：理知と情念の所産、『ピカソ全集 3 キュビズムの時代』所収、講談社、1982
- 20) 飯田善國：ピカソ、岩波現代文庫、2000
- 21) クラウゼヴィッツ：戦争論、岩波文庫、1968
- 22) CARL VON CLAUSEWITZ：On War，Edited and translated by M Howard and P Paret EVERYMAN'S LIBRARY，p.127，1993
- 23) 森林太郎：大戦学理、『鷗外全集 第34巻』所収、岩波書店、1974
- 24) 野口武彦：江戸の兵学思想，中公文庫，1999
- 25) 浄法寺朝見：日本築城史～近代の沿岸築城と要塞、原書房、1971
- 26) 原剛：明治期国土防衛史，錦正社，2002